

Title	礫山と小石川の教会
Author(s)	喜田, 敬
Citation	聖学院大学論叢,18(3) : 211-237
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=83
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

碌山と小石川の教会

喜 田 敬

Rokuzan and a church in Koishikawa

Kei KIDA

On January 22, 1993. with the permission of the Rokuzan Museum, I took some photographs of Rokuzan's sculptures, drawings and his diary observations. After ward, a curator told me that the Museum at present cannot specify the name of the church or the pastor who baptized Rokuzan.

On March 1901. Rokuzan sent letters to his former teacher and his own brother and told them that he had become a Christian, but did not write the name of the church where he was baptized or the name of the pastor who had baptized him. Were there any reasons that Rokuzan had to avoid revealing the names of the church and the pastor?

The purpose of this paper is to consider Rokuzan's real intentions in this matter.

Key words: Disciples, Baptism, Koishikawa, Kawai, Kokkoh

序

1993年1月22日、碌山美術館の許可を得て、同館が所蔵する碌山の作品、資料の撮影を行った。撮影後、93年現在碌山美術館では、碌山の受洗教会および洗礼司式者が特定出来ていないことを知らされた。

1901年3月7日の恩師井口喜源治に宛てた書簡、同年3月8日の長兄荻原十重十に宛てた書簡からは受洗の喜びが読み取れる。だが教会名、司式者名は無い。3月8日の書簡には「去る月廿七日、先生の御教へに従ひ基督教信徒たる正式洗礼を授り申候⁽¹⁾」とある。文中の「先生」は、明治女学校校長巖本善治のことであるため、笹村草家人は、「明治女学校での洗礼⁽²⁾」と推測した。だが記録がない。

碌山は意図的に教会名、牧師名を伏せたようにも思われる。郷里の恩師にも、実の兄にも書き記す事を避けたわけとは何か。今回は、笹村資料、秋山資料を中心に、この点を検証する。

郎に發するものこそ本格の流れであるといふマニフェストをしたのである。」⁽⁷⁾ 教授に就任した石井鶴三の授業第一声を、笹村草家人は回想し、このように記した。

石井と碌山（作品）との出会いを、石井は次のように記している「荻原守衛は明治十二年の生まれであるから、小生には八歳の年長で、不同舎の塾生としては五年ちがいで同學の先輩であるが、小生の入塾した時荻原は既に渡米して居たので、相知ることを得なかつた。明治四十一年春荻原が七年の海外留學から歸朝した時はじめて其名を知り、ついで其年の文展にその作『文覺』の出品を見て、荻原というものに小生の心は捉えられた。更に翌年の文展に『北條虎吉』と『勞働者』二作の出るに及んでことごとく小生の心は魅せられてしまつた。彫刻を勉強して居た小生は未熟ながらうすうすは彫刻の世界の明りを感じていたので、生意氣のようだが其頃周圍を見廻して、先輩にも同輩にもほんとうに彫刻がわかつて彫刻をやつていると思われる人の居ないのに、さびしい思いをしていたのであつた。」⁽⁸⁾ 1908年『明治41年』第2回文展入選作品『文覺』は、必ずしも碌山の秀作と呼べる作品ではないが、当時の彫刻界にあつては際立っていた。だが、第3回文展入選作品『北條虎吉像』紛れも無い碌山の傑作である。石井は更にその時の感動を「『北條虎吉』は實に立派な肖像彫刻である。これが第三回文展に發表された時、一目見て小生はこの作に魅せられ、その前を去りかねて、いつまでも見入つていたことが昨日のようにも思われる。彫刻というものがこんなにも面白いものか、こんなにも魅力あるものか、荻原という人は何とすぐれた彫刻家であるかと其時痛感したことである。其時小生は甚だ未熟な彫刻學生であつたが、その感懐は今思つても誤つていなかったと思う。」⁽⁹⁾と綴つた。この時石井22歳、狂いのない目を持った彫刻學生であつた。それから35年、東京美術学校彫刻科教授となつた石井は、ついに口を開いた。「學生はみすばらしく姿も気分も時の圧力でひしがれていた」時代、芸術など全く無縁と思われた時代に、石井は眞の芸術を説きはじめてしたのである。

石井研究室による碌山研究がはじまつた。笹村は、「終戦後、^{はんごう}飯盒をしょつて助教授として通う私の日々は寧ろ暇に恵まれた妙な状態だったから、学校の文庫に山積する古い書籍や雑誌を調べて数行の碌山に関する記事を入念にカードにとってゆくと、追々この事は誰にきいたらまだわかりそうだという目安がついてきた。光太郎は勿論、安井曾太郎、相馬黒光その他がいた。信州穂高の荻原家の離れ屋敷は碌山の石膏像や絵がつめこまれてひどい状態だった。疎開者が漸く歸つた後だったからだ。その像をよくみると形だけは普通りだが、何しろ半世紀もたっているのだから著しく石膏が老化していつれ崩れると思つた。それで芸大や近代美術館にブロンズとして所蔵してもらつたように話をつけたりもした。『彫刻家荻原碌山』を上梓するについて冒頭に一文をよせられたのは光太郎であつた。光太郎も古い事は忘れてるので碌山の遺著『彫刻真髓』等をもつていって記憶をよみがえらして貰つた」⁽¹⁰⁾という。剛毅木訥、一途な性格の笹村の資料収集にかけた意気込みと並々ならぬ苦勞の跡が窺われる。笹村は、存命の碌山関係者を隈なくあつた。碌山研究者にとつて、笹村は恩人となつた。

さて笹村は、ラゲーザ（Vincenzo Ragusa 1841～1927）とその影響について触れたが、1954年（昭和27年）発行の『信濃教育』6月号には、「明治初年に赤坂離宮等の洋風建築を建てるため、洋風彫刻の必要から、伊藤公がイタリア公使と相談して、その技術者としてフロレンスからラゲーザを招き、粘土や石膏によつて物の形をそつくり作つてみせる技能を伝え、これがのちに官立美術学校にはいり、これにたずさわる者が輩出して、官展の彫刻を掌あくするようになり、今日に及んでいる」⁽¹¹⁾と記している。

石井は、「日本の近代彫刻は明治九年に創設された工部大学の美術学校に彫刻教師とし來朝した伊國人ヴィンツェンツォ・ラゲーザによつて其曙光を見るのであるが、……彫刻の本質が物形模造にあるかの如き誤りを教えてしまつたのはまことに遺憾なことで、……ラゲーザの遺作を見てその仕事物が物形模造に終始して居ること」⁽¹²⁾を指摘した。

伊藤博文が当時のイタリア公使と相談し、ラゲーザを工部大学美術学校彫刻教師に任命したのだという。ラゲーザの日本滞在は1876年（明治9年）～1882年（明治15年）であり、この時代であればフランスという選択肢もあったであろうが、いずれにせよ、ヨーロッパ現代彫刻をリードする芸術家を招聘する事は不可能であり、また日本政府も望んではいなかったであろう。

手の技である技術を教えることは容易であり、その採点はさらにやさしい。しかし心の技である芸術を教えることは、これと異なり、教える側にも習う側にもそれなりの覚悟がいる。教える側の芸術性は常に問われる。ロダンの懐深く入り込んだ碌山は良く学んだ。模写、模刻に明け暮れていた青年たちが碌山の作品に魅了されたのは当然であった。

文展の審査員たちも、碌山の作品を愚作だとは思っていなかったであろう。1910年（明治43年）、遺作『女』は文部省買い上げとなり、『宮内氏像』は、ロンドンで行われた日英博覧会に出品された。ただ、どのように評価してよいのか分からずにいたのではないか。一旦身に付いたもの、一生かかって身に着けたものを脱ぎ捨てるのは難しい。

第2章 光太郎と黒光

影響力を持った証人たち

「荻原守衛はクリスチャンではなかつたやうだが、クリスチャン的信仰心がつよく、信念の固い人物のやうにその頃でも見うけられた。紐育あたりによくごろごろしていた日本人のいはゆる浪人たちのやうにだらしの無い人間でないので、私も彼に心をひかれてゐた。」⁽¹³⁾ 1906年（明治39年）、ニューヨーク留学中の光太郎は碌山と出会った。これは、光太郎の1954（昭和29年）の回想である。

相馬黒光（良）は、「碌山がクリスチャンらしかったのは研成義塾時代だけで歸朝後そういふ處はありませんでした。……主人はキリスト教にはいつてゐましたが、その頃私はぬけてゐました」⁽¹⁴⁾と記している。1925年（大正14年）3月4日、娘俊は28歳の若さで亡くなった。黒光はこれ

を機縁にキリスト教から離れ、仏教に帰依したという。

光太郎は、碌山を「クリスチャン的信仰心がつよく、信念の固い人物」であったが、受洗はしていないように記憶し、黒光は「碌山がクリスチャンらしかったのは」穂高にいた青年時代だけであったと言い切った。どちらが正しいのか。妥当性についての検証は意味を成さない。ここには、光太郎と黒光のそれぞれの願望が現れているのだ。

これら二つの文章は、1956年（昭和31年）3月東京藝術大学石井教授研究室編纂による『彫刻家 荻原碌山』に掲載されている。光太郎はこの年に、黒光はこの前年に、この世を去っており、彼ら最晩年の証言となった。笹村は、「光太郎も古い事は忘れていたので碌山の遺著『彫刻真髓』等をもって行って記憶をよみがえらして貰った」という。同書は、笹村忍耐努力の一冊である。

光太郎と黒光は、碌山に近い存在であり、それゆえ碌山について多くを語り、多くを書き残している。だが、光太郎、黒光の資料は取り扱いに十分な注意が必要である。

1. 碌山と光太郎の留学

光太郎は、1906年（明治39年）2月から約3年半、ニューヨーク、ロンドン、パリに留学し、碌山とニューヨークで出会った。

碌山の渡米は1901年（明治34年）3月であり、1903年（明治36年）にはパリに渡り、アカデミー・ジュリアン（Academie Julian）にも通っていた。光太郎と出会った頃、碌山は再渡仏の準備段階にあった。ニューヨーク時代の碌山の口癖は“ What is Art ”であったという。碌山の留学は、アートを通して人生の何たるかを知ろうとするところの旅であった。

光太郎は1902年（明治35年）7月、東京美術学校彫刻科を卒業し、研究科に残ったが、1905年（明治38年）9月彫刻科研究科から洋画科へ移った。この時期、光太郎は同校教授岩村透のすすめにより留学を決意する。光太郎にとって留学の目的は、見聞を広めることにあった。

生まれも、育ちも、信条も異なる二人は、芸術を通して友となった。しかし、同じ時代、同じ場所で学んだ二人の留学は、全く異なったものになった。

1905年（明治38年）碌山がニューヨークから十重十宛てた書簡には、アメリカについて、次のように記されている。「外国とか文明国とか云ひますと、余程違つた、余程高尚な、余程偉い国と御思ひなさるでせうが、何に人情は少しも変わりません。全く実際です、少しも変わりません。宗教でも教育でも知識でも同じ事です。夫れはエライ人も居りますが、日本にもそれはあるです。只米国には……金持大富豪の多い丈けは一寸日本は及びますまい」⁽¹⁵⁾。碌山は、日米の違いを経済力に見た。その他は日本と何も変わらないという。「人情は少しも変わ」らない。注目すべきは「宗教でも……同じです」という碌山の言葉である。キリスト教国に留学した日本のクリスチャンが等しく味わう経験がここにある。文化が違い、言葉が違つてもこの一点が、彼らを支えた。

この前年1904年（明治37年）日露戦争がはじまった。開戦当初、碌山も日本の勝利に酔いしれたが、戦争の激化に伴い考えが変わっていく。十重十に宛てた同年9月20日頃の書簡には、「敵の敗を聞いて喜ばんか、そはあまりに残酷ならずや。彼等も亦人の子ならずや、」⁽¹⁶⁾とあり、翌1905年（明治38年）2～3月頃の十重十宛の書簡には、「旅順落ち奉天將に落ちんとし、皇軍連勝の報を耳にする毎に人は祝勝の盃を揚げんとし、狂舞乱酔を演ずるに、吾は其何故に而かく彼れ等の喜び祝するやを解す不能。世界平和の為東洋無事の為とは云ひながら、哀れ幾万の生靈は旅順砲臺の下に斃れしぞ、」⁽¹⁷⁾とある。

そして3月20日、碌山は井口に宛て、「予輩は主基督に於て全然戦争の非なるを知る。彼の靈能を以てしてユダの奸謀を知らざらんや、パリサイの軍兵の如きその一指を動かさずして全滅する何ぞ難からんや、彼をしてマホメットの如く劍を以て立たしめば、優に世界を統一する又易々たりなるべし。然るを彼は其のペテロが従者の耳を削りたるをさへ之を叱し、之を療したるにあらずや。而して従容として縛に付き、あらゆる辱を受け遂に十字架上に一度彼は斃れたりき。」⁽¹⁸⁾と書き送るのであった。

前掲の十重十宛て2～3月頃の書簡は、「^{フイバー}疫病にて村海サン、柏井園先生、河井など云うユニオン神学校の友病床にあり、当時非常に多忙一寸失礼します。」⁽¹⁹⁾と結ばれている。画家を志渡米した碌山であったが、ニューヨークに着くと、自分に与えられた賜物と使命について悩むようになる。美術学校に行くべきか、神学校に行くべきか決めかねた。結局、明治女学校の生徒（片岡富子）から送られた一通の手紙によって、碌山は美術学校への入学を決意する⁽²⁰⁾のだが、ユニオン神学校に留学した日本人学者、学生との交流は盛んになっていく。

1910年（明治43年）『商業界』1月号臨時読み物「世界見物」に掲載された、森田生筆録による碌山のインタビューには、次のようにある。「亜米利加はですね、僕等は初め想像した時には、自由の国だと云ふから、先頃日本で非常にやかましく騒いだ例の自然主義の国民だと思って行っただけですが、まるで想像が外れて、自由と云っても実に厳格の意味においてので、男女の交際なども正しいものです。」⁽²¹⁾碌山はアメリカにあつて、実に見るべきものを見ていた。

碌山のパリ留学は1903年（明治36年）10月～1904年（明治37年）5月と1906年（明治39年）10月～1907年（明治40年）12月の2回にわたった。1903年10月、初めて見るナポレオン3世の都に、興奮した碌山だったが、11月に入ると、井口に宛て「仏人は日本人に似たる所余程多き様に候。独立自由の意志少なくケチ……。旧教を奉じて極めて保守的也（一般に）」⁽²²⁾と、11月31日には「日本人に似て真勇なく浮華浅薄也。コーヒー店と女郎とは仏国政府が外国人を巴里に集むる手段の由。以て如何に巴里が奢多、淫遊、墜愚の徒の多集せるかを知るべし。」⁽²³⁾と書き送った。碌山は、フランス人を「日本人に似て」いるという。碌山は多分に、当時のアメリカ人との比較でフランス人を見ていたと思われる。

1906年（明治39年）12月31日、2度目のパリ留学においても碌山は井口に宛てた書簡に、「仏人の

気質は軽薄で浮華でケチですから僕は嫌ひです。……巴里の売色界などの事は申し上げられない程ヒドイものです」⁽²⁴⁾と記して入る。だが碌山は全てのフランス人を嫌っていたわけではない。碌山のアメリカの親友ウォルター・パック（Walter Pach）が戸張孤雁に宛た1910年11月28日付けの書簡には次のようにある。“Once we dined together at a café in the country near where he lived. There were some peasants there who were amusing themselves in a rough manner Mr. Ogihara was much interested and pleased and said “I like them, - because I, too, I am of farmerpeople”.”⁽²⁵⁾ 碌山は、飾り気のない田園の人々が好きであった。

2度目のパリ、碌山はアカデミー・ジュリアンの彫刻部に在籍した。当時を回想し本多功は、「彫刻の方の先生は誰でしたか、とにかく毎週きては學生の仕事を批評してくれましたが、荻原は一向そんなものは聞いてみずどしどし勝手にやつてみました。第一荻原は佛蘭西語が丸でわからなかったし、その批評を英語に翻譯して貰つて聞いたつて當てになんかならなかつたからです。」⁽²⁶⁾と記した。後に一水会を創立する画家安井曾太郎も、笹村に宛てた書簡に、「荻原君は優秀の方でコンクールでは度々受賞仲々はばをきかせていました。大きな聲で英語（アメリカ語）をしゃべつて仲々元氣でした。」⁽²⁷⁾と記している。碌山は「佛蘭西語が丸でわからなかつた」、そしてアカデミー・ジュリアンでは、「大きな聲で英語（アメリカ語）をしゃべつて仲々元氣で」あったという。碌山は斎藤与里に、「時間さへあると佛蘭西語もやるんだがなア」⁽²⁸⁾と話したという。フランス語を嫌っていたのではなさそうだ。

ニューヨークの碌山には、仕事があった。善良なアメリカ人、フェアチャイルド家の学僕の仕事は、収入にもなり、また心の支えにもなった。第二次ニューヨーク留学は、第二次パリ留学の準備の日々であった。彼はそのために懸命に学んだ。そしてパリ。本番の日々は緊張の連続であった。不安を振り払うように、大きな声でアメリカ語をしゃべり元気を装った。物理的にも精神的にも時間の無い事に苛立った。What is Art. と問うたびに解らなくなっていく。碌山はいつしか自分の精神状態に危険なものを感じ始めた。碌山は光太郎に、「頭が非常に悪くなつたので此の夏は倫敦で遊びたいと思つている。倫敦に行つたら君に是非会はう」⁽²⁹⁾と書き送った、という。このロンドン訪問は、碌山の期待以上に実り多い旅となる。

パリに戻った碌山は精力的に学んだ。パリに来たパックを伴い憧れのロダンにも会った。以下はパックの回想である。I translated for Mori and Rodin at one of their interviews, and when I told Rodin that it was the sight of his work, “Le Penseur” that made my friend turn to sculpture, he was pleased and said “Then perhaps I can consider him my pupil”.”⁽³⁰⁾

1912年（明治45年）、パリを訪れた与謝野寛は東京朝日新聞にロダン訪問記を連載したが、7月16日には次のように書いた。「翁は『自分の弟子で若くして歿した日本人を知って居るか』と問はれたので、僕等は生前に交際しなかつたが其遺作を屢々觀たことを告げると、翁『彼は自分の許へ度々來たのでは無かつたが、彼は善く自分の製作を觀て自分の藝術の精神を領解した。佛蘭西人よりも

より善く領解した。そして自分の藝術を模倣せず、彼自らの藝術を発見した。彼の死は彼の不幸のみで無い』と云つて日本の為に惜しまれた」⁽³¹⁾。碌山はロダン「の許へ度々来たのでは無かったが」、ロダンの制作を善く観てその精神を理解したという。パックの書簡からは、碌山のロダンへのインタビューは、複数回にわたった事が読み取れる。その全てがパックを伴つての訪問であつたとも思われる。碌山は見るものを見、そして聞くものを聞いた。ロダンが「自分の弟子」と呼ぶほどに学んだ。本多が名前も覚えていないアカデミー・ジュリアンの彫刻教師の批評を碌山が聞かなかつたのは、彼が単にフランス語がわからなかつたからなのか。パリにあって、碌山の彫刻教師は、ロダンただ一人であつた、と考えるとよいのではないか。

さて、光太郎の留学は碌山のそれと異なつていた。高村光雲の長男に生まれ、父の仕事を見ながら育ち、東京美術学校彫刻科を卒業し研究科に進み、後に転科して洋画を学んだ光太郎にとって、ニューヨーク美術学校での特別賞受賞や待生推挙は、難しいことではなかつた。だが彼は、このニューヨークに居心地の悪さを感じはじめていた。

1925年（大正14年）の詩、『白熊』は、
「ザラメのやうな雪の残つてゐる吹きさらしのブロンクス パークに、
彼は日本人らしい啞^{ジャップ}のやうな顔をして
せつかくの日曜を白熊の檻の前に立つてゐる」⁽³²⁾。

と始まつている。

貴重な留学の日々である。休みの日も有意義に過ごしたい。だが光太郎は、目的を持ってブロンクス・パーク（The Bronx Park）に来たわけではなさそうだ。そこで見つけた白熊に見入りながら、彼はいろいろなことを考えた。そして、この詩の終わりに、

「教養主義的濫情のいやしさは彼の周圍に満ちる。
息のつまる程ありがたい基督教的唯物主義は
夢みる者なる一日本人を殺さうとする。

白熊も黙つて時々彼を見る。

一週間目に初めてオウライの聲を聞かず、
彼も沈黙に洗はれて歴大な白熊の前に立ち盡す」⁽³³⁾。

と記した。

江戸情緒を残した東京に生まれ育つた光太郎は、高度に近代化したニューヨークに違和感を覚えたであろう。人的環境は耐え難いものになっていく。クリスチャンでない光太郎には、これが「基督教的唯物主義」に思えてならなかつた。アメリカを見るために渡航した光太郎だったが、いつしかアメリカに見られている幻想を抱くようになっていく。

1926年（大正15年）の詩、「像の銀行」には次のようにある。

「セントラル パアクの動物園のとぼけた像は、
みんなの投げてやる銅貨コッパアや白銅ニツケルを、
並外れて大きな鼻づらでうまく拾つては、
上の方にある像の銀行エレフアツバンクにちやりんと入れる。

時時赤い眼を動かしては鼻をつき出し、
『彼等』のいふこのジャツプに白銅を呉れといふ。
像がさういふ、
さう言はれるのが嬉しくて白銅を又投げる。

印度産のとぼけた像、
日本産の寂しい青年。
群集なる『彼等』は見るがいい、
どうしてこんなに二人が仲が好過ぎるかを。

夕日を浴びてセントラル パアクを歩いて来ると
ナイル河から来たオベリスクが俺を見る。
ああ、憤る者が此處にもある。
天井裏の部屋に歸つて『彼等』のジャツプは血に鞭うつのだ⁽³⁴⁾。
檻の中の動物たちとの同一化。碌山のいう、「人情は少しも変」らない、「宗教でも、教育でも、
知識でも同じ」ニューヨークで、光太郎は孤独であった。

「一九〇七年（明治四十年）六月、私は紐育のアート・スチューデント・リーグの學期を終へると英國に渡り、ロンドンに落ちついた。テムズ河の北岸パトニ - 地区の或る素人下宿の三階に假寓、ブランクマンの畫學校に通ひながら、大英博物館、サウス・ケンシントン美術館其他の研究にいそしんでゐた。」⁽³⁵⁾ 1954年（昭和29年）に書かれた光太郎の回想である。さらに光太郎は碌山の渡英について次のように記している。「まだロンドンの霧の始まらないその年の九月に彼は巴里からやつてきて、パトニ からは遠いトテンナム地区に陣取った。……彼は早速テムズ河畔の私の寓居を訪れ、テムズ河の美を満喫しながら、終日語り合つて飽きなかつた。」⁽³⁶⁾ これらの記憶のもととなった『彫刻真髓』には次のようにある、「テムス河畔の僕の下宿の二階で一日快談に耽つた。僕は埃及の本を持ち出した。荻原君はセザンヌの展覧會の話を持ち出した。下宿屋の婆さんが同君を評して “He has something very precious” と評したのも此時であつた。倫敦にはかなり長く滞在

して居た。トテンナムの同君の僑居へも訪ねて行つた。一緒に美術館をみて歩いた。埃及彫刻の室で半日暮した事もあつた。荻原君が巴里へ歸つた後で、『ああ、好い人だ。面白い藝術家だ。本当の作家だ』と思つた。⁽³⁷⁾ ロンドンでの再会が、二人を親しい間柄にした。

ロンドン留学で光太郎がはじめて間借りした家(図 - 1)は、パットニー(71Deodar Road, Putney)にある。光太郎はこの家の2階若しくは3階に住み、ブラングインが校長を務める画学校 London School of Art へ通っていた。距離はあるが、石橋和訓に紹介されたこの下宿を光太郎は気に入った。家の裏にはテムズ河(River Thames 図 - 2)が流れ、パットニーは懐かしい向島のように思えた。光太郎はよく、パットニー・ブリッジ(Putney Bridge 図 - 3・図 - 4)を散歩した。マンハッタンの喧騒を逃れ、光太郎は幸せであった。

光太郎の下宿の主人は碌山について、“He has something very precious” といったという。日本人も外国人も「人情は少しも変」わらないと信じる碌山の人柄を、この婦人は見抜いていたようである。

1954年(昭和29年)光太郎は留学時代を思い出し、「紐育からロンドンに来てびつくりしたのは、白人の美しい女中が入口の階段などを洗つてゐることであつた。紐育ではさういふことはすべて黒人がしてゐたので、これでまづ非常に由緒のある國に來たやうな氣がした」⁽³⁸⁾と記した。差別される事に敏感な人間は、差別することに鈍感なのかもしれない。光太郎この時71歳、彼は生涯、肌の色から自由になることはなかつた。

1908年(明治41年)6月、一年間のロンドン滞在の後、光太郎はパリに渡つた。

1947年(昭和22年)の詩『パリ』の終わりには次のようにな

「フランスがフランスを超えて存在する

この底無しの世界の都の一隅にゐて、

私は時に國籍を忘れた。

故郷は遠く小さくけちくさく、

うるさい田舎のやうだつた。

私はパリではじめて彫刻を悟り、

詩の眞實に開眼され、

そこの庶民の一人一人に

文化のいはれをみてとつた。

悲しい思で是非もなく、

比べやうもない落差を感じた。

日本の事物國柄の一切を

なつかしみながら否定した。」⁽³⁹⁾

取り付かれたように戦争詩を書き続けて來た光太郎が、敗戦によって思い起こした懐かしい青春

の日々がここにある。

1910年（明治43年）光太郎は、4月の『趣味』に散文「珈琲店より」^{カフエ}を掲載した。パリのカフェで知り合った女性と一夜を共にした光太郎は、翌朝この女性の眼を見た。「あをい眼！ その眼の窓から印度洋の紺青の空が見える。多島海の大石の映してあるあの海の色が透いて見える。NOTRE DAMEの寺院の色硝子の断片。MONETの夏の林の蔭の色。濃いSAPHIRの昌玉をMOSQUEEの寶藏で見る神秘の色。……ふらふら立つて洗面器の前へ行つた。熱湯の蛇口をねじりる時、圖らず、さうだ、はからずだ。上を見ると見慣れぬ黒い男が寝衣のままですつてゐる。非常な不愉快と不安と驚愕とが一しよになつて僕を襲つた。尚はよく見ると、鏡であつた。鏡の中に僕が居るのであつた。『ああ、僕はやつぱり日本人だ。JAPONAISだ。MONGOLだ。LE JAUNEだ。』と頭の中で弾機の外れた様な声が出た」⁽⁴⁰⁾。

詩『パリ』は次のようにはじまる。

「私はパリで大人になつた。

はじめて異性に觸れたのもパリ。

はじめて魂の解放を得たのもパリ。

パリは珍しくもないやうな顔をして

人類のどんな種屬をもうけ入れる。」⁽⁴¹⁾

碌山が「自由といつても実に厳格の意味において、男女の交際なども正しいものです」と語つたニューヨークで、光太郎は差別を感じた。そして碌山が、「仏人は日本人に似たる所余程多き様に候」と書簡に記したパリで、光太郎は「時に國籍を忘れた」。だが「はじめて異性に触れた」朝は、「不愉快と不安と驚愕」の朝となつた。“LE JAUNE”。光太は、外からの差別ではなく、内からの差別に襲われた。光太郎はいつの時代も、この劣等感と優越感の間で揺れ動くのであつた。

1910年（明治43年）7月の散文『出さずにしまった手紙の人束』には、「獨りだ。獨りだ。僕は何の爲めに巴里に居るのだらう。……僕の身の周圍には金網が張つてある。どんな笑談の中團樂の中へ行つても此の金網が邪魔をする。海の魚は河に入る可からず、河の魚は海に入る可からず。駄目だ。早く歸つて心と心とをしやりしやりと擦り合せたい。寂しいよ。」⁽⁴²⁾とある。だが71歳になつた光太郎は、「パリは珍しくもないやうな顔をして / 人類のどんな種屬をもうけ入れる」と書くのであつた。

『出さずにしまった手紙の人束』のはじまりには、「親と子は實際講和の出来ない戦闘を続けなければならない。親が強ければ子を墮落させて所謂孝子に爲てしまふ。子が強ければ鈴虫の様に親を喰ひ殺してしまふのだ。……今考へると、僕を外國に寄來したのは親爺の一生の誤りだつた。……僕は今に鈴虫の様な事をやるにきまつてゐる。」⁽⁴³⁾とある。子どもが親を越えることを喜ばない親があるのか。光太郎は「パリではじめて彫刻を悟つたと感じた時、光雲との関係が不安であつた。父への劣等感と優越感。光太郎の留学は、光雲ではなく光太郎「の一生の誤りだつた」かもしれな

い。

『出さずにしまった手紙の人束』には更に、「僕は今日不圖妙な事を考へた。『秘密の價値』といふ事だ。……考へてみると秘密の無いものに價値はない。又價値あるものに秘密の無いものはない。僕は自分で自分を秘密にするのだ」⁽⁴⁴⁾と記した。光太郎はパリで「自分を秘密にする」ことを考えたという。だが事實は、自分を直視できない言い訳を、パリで思いついたのではないか。

『パリ』と同じ年の詩、『彫刻一途』の冒頭には、

「日本膨張悲劇の最初の飴、
日露戦争に私は疎かつた」⁽⁴⁵⁾

とある。反省にも、言い訳にもとれる書きだしたが、この詩は光太郎の東京美術学校研究科時代を回想している。その終わりには、

「日露戦争の勝敗よりも
ロヂンとかいふ人の事が知りたかつた」⁽⁴⁶⁾

とある。碌山が切々と非戦を綴った日露戦争であったが、光太郎には興味がなかった。人の痛みがわからなかった。それよりロダンの事が知りたかつたという。だがパリ滞在中、光太郎はこのロダンに会うことをためらった。忙しいロダンに迷惑がられるのを恐れたのである。光太郎は或る日曜日、日本人の仲間の後についてムードンのアトリエに行ってみたが、ロダンは留守であった。これに対し、フランス語がまるで分からない碌山は、パックを伴ってロダンに会っている。アートを通して人生の何たるかを知ろうとする碌山は、ロダンに会わない訳にはいかなかったのである。光太郎は碌山ほどに、「彫刻一途」の生き方は出来なかった。

光太郎は言葉が巧みであった。しかし碌山の言葉には力があつた。日露戦争の最中に書かれた非戦の思いは人道主義に始まり、「主基督に於て全然戦争の非なるを知る」に至った。碌山は人の悲惨を、キリストを通して見るようになる。

1954年（昭和29年）9月、碌山の調査を進めていた笹村のもとに、白瀧幾之介から手紙がとどいた。そこにはパリ時代の碌山について次のように記されていた。「一見豪傑型に見えたが、クリスチャンで品行方正非常にやさしい人であつた。在留の本保義太郎君（註 - 金澤出身の木彫家）の肺結核で斃れし時なども伝染を怖れて何れもが近づく事を嫌忌するにも不拘、彼は親切に最後の始末迄よく世話して呉れた。」⁽⁴⁷⁾ 将来を囑望されていた官費留学生本保は志半ばパリで死んだ。もし碌山がいなかったら、なんと孤独な最後であったことか。碌山は、この善行について誰にも語らなかった。笹村の熱意にこたえて、白瀧が明かさなければ、誰も知る事のない事実があつた。

碌山の言葉と作品には、碌山の生き方そのものが現れている。

2. 黒光とミッションスクール

星良（黒光）のキリスト教との出会について、1936年（昭和11年）発行の著書『黙移』には次の

ようにある。「小學校に通ふ頃になつて、教會の前を通りますと、あのやはらかな讚美歌の聲が窓を洩れて聞こえました。私は不知不識涙ぐんでその窓の下に引き寄せられ、またその戸口に立つて見ました。」⁽⁴⁸⁾「先生のお話になると、視線を一つにして、頬をあかくして聴き入つてゐます。私はそれがうらやましくなつて、いつまでも教會の前を立ち去りかね、窓のあたりを幾度振り仰いだかしれません。……私はとうとう日曜學校に入り、その幸福な子供の列に加はりました。」⁽⁴⁹⁾星家は「伊達藩の漢學者の家で……祖父は晩年、評定奉行をつとめ……儒教を奉ずる家」⁽⁵⁰⁾であった。だが黒光は儒教に、「子供心の満たされぬもの」⁽⁵¹⁾を感じていた。「佛教徒である友達の家を眞實うらやましく思つた」⁽⁵²⁾りもした。そして、小學校に通う頃になり、日曜學校と出会う。

「さて小學校を終り、いよいよ自分自身の願望を強く抱く年頃にもなりまして、私の心を惹きつけるものは、東都に於ける明治女學校でありました。」⁽⁵³⁾黒光は、明治女學校に学ぶ同郷の先輩から話を聞き、東京に出たくなる。しかしその頃、父と弟が大病をし、東京行きは断念せざるをえなかった。1891年（明治24年）黒光は「明治女學校への憧れを抑へて宮城女學校に入学」⁽⁵⁴⁾した。1892年（明治25年）同校では生徒によるストライキが起こる。黒光はその原因を、次のように記している。「明治二十四五年頃は女子教育勃興の機運が最高潮に達した時でありまして、明治女學校のやうな藝術教育があらはれる一方には、所々にミッションスクールが建立され、宮城女學校もその一つで、アメリカからお金が來て經營されてをりました。……何から何までアメリカ式に教育されてをりました。」⁽⁵⁵⁾「日本人を日本の傳統を無視して教育する、この無理に學校当局は全く氣がつかかなかつたのであります。」⁽⁵⁶⁾黒光は、「その事件で退校になつた五人の先輩に殉じて」⁽⁵⁷⁾自分も退校したという。黒光自身は、ストライキに共感したが、関与はしていない。東京へ出る口実が欲しかったのだろう。この退学を、「上京の機會となつたのは思はぬ幸ひでございました」⁽⁵⁸⁾と記している。黒光は、この後フェリスに入学した。

1869年（明治2年）、改革派の宣教師メアリ・キダ（Mary E. Kidder, 1834～1910）はブラウン博士（Samuel Robbins Brown, 1810～1880）の推薦により來日し、翌年ヘボン博士（James Curtis Hepburn, 1815～1911）の施療所で授業を始めた。キダ・36歳、フェリス女学院のはじまりである。

ブラウン、ヘボンの協力もあり、フェリスは筋金入りのキリスト教学校としてスタートした。1875年（明治8年）、山手178番に校舎を建て「フェリス・セミナー」と名づけ、1889年（明治22年）に「フェリス和英女學校」と改称する。

黒光はフェリスについて、次のように記している。「第一志望の明治女學ではありませんでしたが、その頃のミッションスクールでは最高峰のフェリス女學校、一部の女學生の憧憬の的となつてゐたフェリスに入ったことは、いろいろの意味に於て私の満足であり、誇りでもありました。先づ學校の設備の完全なものには全く驚いてしまひました。地下室には機關庫もあつて、冬には至るところスチームが通り、栓を捻ぢればお湯が出る、各級には本式のストーブが赤々と燃え、瞳をボールドに集中してゐる娘達の頬をいとゞ熱くしました。水は和蘭の風車畫にあるやうな風車によつ

て、深井戸から高い所の大タンクに吸ひ上げられ、その風車、タンク、校舎の壁、悉く赤一色に塗込められて、ただ窓枠だけが濃いグリーンであつたのはひとしほそこをエキゾチックに致しました。⁽⁵⁹⁾ 黒光は、フェリスの優れた教育や設備そして名声に満足した。しかしそこに集う生徒たちに受け入れがたいものを感じはじめる。黒光は、ある日曜日に奉仕のための編み物をしていた時のことを次のように記している。「上級の友達が来て『日曜に編物などしていけないわ』と咎めました。『どうして不可なのでせう？』私はあまりに意外なのにおどろいて編棒を膝の上におき、その友の顔を見上げて申しました。『安息日にはバイブルに關した宗教書類のほかは本も讀んではいけないし、仕事は全然してはならないつてこと、あんたは知つてるんぢやないの』とますますきびしい。『自分のためだけでなく、人のために善いことであつてもいけないのでせうかね』かう私はいひましたが、その場合争はないで編物を片付けてしまひました。しかし心の中では黙からず不服でした。そして直ぐ聖書を取り出し開いて見ました。⁽⁶⁰⁾ 黒光は、マタイによる福音書第12章1節～12節を読み、自分の正しさを確認したという。また、「このことがあつてから私の胸の中は薄雲がかかつたやうになりました。西洋人は日曜に盛装して教會に行く習慣があります。校長の家族も日曜毎に人力車に乗つて教會にまゐりました。日曜日には一切の買物を禁じられてゐるのに、車夫に車賃を拂ふのは差支へないのだらうか、と先ず疑問が起つて來ました」⁽⁶¹⁾ と記した。さらに「フェリスでは何か疑問を抱いてをつても、それを口に出して、きけば『聖靈をけがすものだ』と他から壓迫される位であつた」⁽⁶²⁾ と記している。パリサイ人的上級生の存在や、「聖靈をけがす」という最大級の非難を受けたなど甚だ信じ難い内容だが、これらは全て『黙移』に記されている。事の信憑性はともかく、黒光60歳のフェリスに対するの気持ちがここあつた。

「しかしフェリスの生徒の言葉づかひが荒つばいには感心出來ませんでした。妙に尻上りなアクセントをつけるのは、濱言葉の影響をここでもまぬがれなかつたものとしても、フェリスばかりでなく、一體にミッションスクールの言葉はぞんざいでありました。無論それはその当時のことで只今は存じません。」⁽⁶³⁾ 仙台出身の黒光にとって、横浜の言葉は奇異なものであつたらう。しかしそれが次第に耳障りなものになっていく。「日本人を日本の傳統を無視して教育する」「ミッションスクールの言葉はぞんざい」になると考えた。だが黒光は、「それはその当時のことで只今は存じません」と付け加えている。40年以上の月日は日本を変えていた。ミッションスクール受難の時代が迫っていた。1941年（昭和16年）、開戦にともないフェリスも「横浜山手女学院」と校名を改称せざるをえなくなる。

1956年（昭和31年）、黒光の遺稿をまとめ、相馬安雄は『適水録』を出版した。その序文に安雄は次のように記している。「黒光ぐらい生涯を通じて自己の思いの儘をやつてのけた人は稀である。総べての言動が自己中心に為されている。少なくともわが邦の女性として、且また人の妻女でこれだけ自由奔放に振舞つた者は珍らしい。……が併し倅として常に父と共に母を同時に觀察する機会を有した私の眼から見れば、母の自由奔放さは稀に見る寛大な父の性格に因るものであつた。

それは母の察知出来ない程の大きさであった。恰も孫悟空に対する仏掌の如き関係であろう。」⁽⁶⁴⁾
『黙移』はまさに、黒光が見たいもだけを見て綴った自叙伝となった。

光太郎・黒光の証言は、戦後の碌山研究に大きな影響を与えている。笹村は、「碌山にとって基督教は思想ではあつても宗教ではなかつた、と云ふのが二十代の彼には信仰に陥入るほどの内面の斷層は生じてゐなかつたからで、渡米前に洗禮など受けたと云つたやうな外形だけのものは歸朝の後には殆ど脱落してゐたやうである。不如意の海外生活に處してプロテスタンチズムは思想として自律の強い力を興へて彼を崩さない支へにはなつたし、これは終生に及んでゐる」⁽⁶⁵⁾と齒切れの悪い考察をしたが、ここには明らかに晩年の光太郎と黒光の証言からの影響が見られる。

第3章 小石川の教会

1. 洗礼者川井運吉

秋山操⁽⁶⁶⁾の著書『基督教会(ディサイプルス)史』第9章「教役者略伝」の川井運吉の項には、次のようにある。1896年(明治29年)4月、当時27歳であった川井は、「明治女学校教師をしていた石川角次郎の世話で小平小雪と結婚し、ただちに足利に赴いて伝道を始めた。小雪は明治5年宮城県に生れ、札幌スミス学院(現、北星学院)、宮城女学校(ここはストライキで退学)を経て二五年に明治女学校に移ったが、その後中退してガイ夫人のヘルパーとなり、同夫人経営の第六天小学校の教師をしていた。」⁽⁶⁷⁾明治「三四年、有志の者によりキリスト教新聞の発行計画がたてられ、彼はその資金集めのため三月渡米した。……帰国後足利を去り三六年から明治女学校の教師となった。

なお川井は明治三四年二月、小石川で荻原守衛(彫刻家、後に高村光太郎とともに著名)に洗礼を施し、同年三月渡米の際同行した。後に荻原を後援したのは同郷の相馬愛蔵と黒光夫人(前名星良子)で、黒光は川井夫人小雪と宮城学校時代からの親友、そんな関係から相馬の娘(後のポーサ俊)は女子聖学院で学んだ。」⁽⁶⁸⁾

1901年(明治34年)1月13日、渡米1ヵ月前に碌山が井口に宛てた書簡には、「急にも云ふは川井連太郎氏 川井運吉を誤記 明治女学院寄付金の事に付き近々渡洋いたさるに付、氏と同道いたさんと存候。既に岩本氏の賛成を得たれば家兄の意見一つにて相定まる事。兄もさぞ不賛の事とは存候へ共、ドーゾ一つ寄合に勤めて被下度候。」⁽⁶⁹⁾とある。碌山が川井の名前を誤記したのは、面識が無かったからなのかもしれないが、突然の好機に慌てた様でもある。彼は、東京の住まいであった明治女学校の校名まで間違えている。井口はこの書簡を基にしたのであろう、『彫刻真髓』の「碌山荻原守衛氏略歴」に、明治「三十四年の三月になつて川井運吉氏が明治女学校の資金募集の為に渡米することになつたが、彼も是非外國へ行いつて美術を研究して見たいと思つて居たのであるから一先づ故郷に歸つて父兄の許を受けて同月十三日横濱を出帆した」⁽⁷⁰⁾と記した。だが川井の渡

航の目的である「キリスト教新聞の発行」のための「資金集め」が、「明治女学校」のために変わっている。前掲の『彫刻家 萩原碌山』に黒光は、「学校の経営を助けるために明治学院出身の先生で川井運吉といふ人が基金募集にアメリカへ出かけることになった」⁽⁷¹⁾と記しているが、碌山の思い違いは黒光のせいなのか。何れにせよ、今日碌山関係の書籍の多くは、川井の渡米理由を、明治女学校のための募金、と記すようになった。川井が明治女学校で教鞭をとるのは、碌山が留学した2年後であったのだが。

1901年（明治34年）3月21日ホノルル入港の前日、碌山は川井の船室で井口・相馬愛蔵・黒光の3人に宛て一通の手紙を書いた。その中で碌山は、横浜出航の様子を次のように記した。「横浜港頭夕陽既に山の手につき紫雲埠頭をかすむる頃、最終に香港丸を離れし小蒸気こそ我が最愛なる如雲、有美、紫苑ら三先生、並びに兄を初め足利連の総勢を乗せて、十年の別離、一声の気笛、サヨオナラとも口の中、砕けよと計り握りしめしは誰の手ぞ。涙にくもる御顔を拝することも得ざりしは、言はずもがな最愛の先生。『体をな一大切に、夫れが一番だ』と親切なる有美先生。」⁽⁷²⁾川井と碌山を見送る人々の中に明治女学校教員、そして1896年4月から川井が牧会にあたっている足利の教会員等の姿があった。

川井は、「明治二年三月秋田市手形の士族川井兵九郎の次男として生れ、」⁽⁷³⁾1884年（明治17年）10月、「ガルストからの初期の受浸者」⁽⁷⁴⁾となり、17歳の頃「青柳猛（有美）とともにミス・ハリスン（明治一九年七月秋田に着任）のバイブルクラスに出ていたという。」⁽⁷⁵⁾

青柳は、「明治六年九月秋田市に生まれ、……洗礼は明治二〇年にガルストから受けた。二三年一月京都同志社に入学、二七年文学政治経済科を卒業して秋田に帰郷、なすこともなくしている時。親友川井運吉の知合いであった石川角次郎（当時明治女学校教師）の紹介で二八年九月から巖本善治の明治女学校で倫理と英語を教えることになり、」⁽⁷⁶⁾以後青柳は石川と親しくなる⁽⁷⁷⁾。碌山は、この青柳から英語を習った。

石川は、「慶応三年『一八六七』七月、栃木県足利」⁽⁷⁸⁾に生まれ、植村正久の感化により入信。明治「二〇年三月渡米し、」⁽⁷⁹⁾アズビルにより浸礼を受けディサイプルの会員となる。帰国後、「明治二五年九月から二九年五月まで東京成立学舎、東京専門学校、明治女学校、国民英学会などで教え、」⁽⁸⁰⁾「学校教師をするかたわら郷里足利で伝道した。」⁽⁸¹⁾明治「二九年五月から三〇年八月まで県立岡山尋常小学校の教諭を勤め、……三〇年九月から三六年四月まで学習院教授をし、」⁽⁸²⁾「明治三六年ガイ博士が聖学院神学校を創立するに際し、彼は学習院教授の栄職を去って、四月からその教授に就任したのである。……ついで三八年一〇月聖学院英語夜学校、三九年九月聖学院中学校が設立されるにおよび、それらの校長として経営に当たった。」⁽⁸³⁾

日本におけるディサイプルの宣教は、秋田にはじまるが、川井、青柳は、「ガルストからの初期の受浸者」であった。川井、青柳、石川、巖本は親しい関係にあったが、碌山が関わっていたのは、当時明治女学校の教員であった、巖本と青柳である。碌山にとって川井は、恩師の親友である

が、留学を機会に知り合った人物である。それにしても、碌山が洗礼者としての川井の名を記さなかったこと、さらに黒光が、どの著書にも記していないのは不思議である。川井の妻小雪は、黒光の敬愛する先輩であり、『黙移』にも「宮城女學校に入る」、「小平小雪さんの信仰熱」等で、小雪について、尊敬をもって書き綴る黒光であったのだが。

2. 小石川の教会

碌山が受洗した教会について記さなかった理由については、2つの可能性が考えられる。

まず、小石川基督教会の歴史の複雑さによる可能性である。

以下は、秋山の小石川基督教会〔開設〕⁽⁸⁴⁾ 及び〔歴代教師〕⁽⁸⁵⁾ の年表である。

〔開設〕

武島町婦人会	明治二三年
大門町伝道所	明治二四年一〇月
関口教会	明治二八年 三月
小石川独立教会	(明治三三・四～三八・三)
小石川教会	明治三九年一一月
江戸川伝道所	昭和二三年 一月
小岩教会	昭和二五年 七月

〔歴代教師〕(前任地) 在任期間

ミス・ワイリック	明治二三年 六月～三三年 九月
スナドグラス	二四年 ~ 二六年
ガイ	二六年一二月～三三年 一月
西岡正親	二八年 三月～三〇年 九月
青柳猛(明治女学校)	三〇年一二月～三一年
斎藤昌国(秋田)	三一年 九月～三六年
ミス・リオク	三三年 九月～大五年
ヘーギン	三三年 九月～四〇年
石川角次郎(名誉牧師)	三七年 三月～三七年 九月
長谷川新一郎(主任)	三七年 九月～三八年
河合禎三(兼任)	三八年 三月～三九年一〇月
河合禎三(専任)	三九年一一月～四二年一〇月

ワイリック(Loduska Wirick)は、「一八五六年にアイオワ州に生まれ、同州デモインのドレーク大学に入学、同大学のベル・ベネット・バンドの支持で明治二三年六月来日した。……小石川武島

町に居を構え婦人会を開いて伝道を始めたが、二四年一〇月頃から同大門町に家を借りて日曜学校を開き、またスナドグラスの援助で日曜日午後説教会を開始した。ミス・ワイリックは身を持つること薄く収入のほとんど全部を伝道に投じた。伝道のかたわら自宅でも数名の少女を養成していた。二七年には同郷のガイの援助を得、自費で関口水道町に教会堂（ドレーク・チャペル）を建設し、のちにこれをミッションに寄贈した。これが関口教会で、小石川基督教会の前身である。⁸⁶

明治「三〇年九月、ミス・ワイリックは米国休暇から日本に帰り、その際関口教会堂をミッションに寄付した。一方激しい伝道に全く健康を害した西岡牧師は、ミス・ワイリックの帰国を待って辞任し、静養に努めた。……その後はガイ、青柳猛、マーシャル、石川角次郎、長谷川新一郎らが集会を指導した。中でも石川は、日本の教化はわれわれの責任であるとして、熱心に伝道した。三〇年一二月から青柳猛はガイに頼まれ、関口教会の講壇を援助した。……青柳は三一年四月の年会には関口教会牧師として出席している。」⁸⁷

だが、「その後、ミス・ワイリックと他の宣教師の間に誤解を生じ、宣教師側はガイ宅で協議の結果、関口教会堂をミス・ワイリックに返還、閉鎖する事になった。……関口教会閉鎖とともに、同教会員である石川角次郎、宮崎八百吉、松田学、木村米三郎、高橋維孝、江川七郎ら十数名は松田宅で集会を始めた。これにはガイ、デービー、プルエットらの宣教師も出席し、日本における唯一の独立自給教会として喜ばれた。約一ヵ月後、小日向台町二丁目の木村米三郎宅に移り、小石川基督教会の看板をかかげた。」⁸⁸

「関口教会は約半年間閉鎖のままであった。ミス・ワイリックはこれを伝道上の不祥事として深く反省し、関口教会およびミッションとの関係を絶ち、他に伝道の道を求めて進んだ。そこで、ミッションではミス・リオクを専任宣教師とし、同年九月関口教会を再開」⁸⁹した。

碌山が受洗した頃、ミッションの関口教会と小石川独立教会の2つの小石川教会が存在していたのである。

もう1つの可能性は、ディサイプルススの洗礼にある。

「『基督教会』は米国に興ったプロテスタント教会の一派で、Christian Church(Disciples of Christ)というのが原名である。……この派は、米国独立戦争後、西部へ向って大規模な移民の移動が行われていた一九世紀の初めに起った教会改革運動に端を発している。それだけに、最も米国的な宗団で、個人の良心の自由を重じた点では、民権条令と同じくらい米国的である。従来、この派は教派ではなく運動、すなわち新約聖書にさかのぼり、みずからをクリスチャンと呼ぶすべての者が神の下に最終的に一体となるまでに至る運動だといわれて来た。……彼らは初代教会の単純さと清さに復帰することができるとの確信に立っていたのである。」⁹⁰「この一派はキリスト以外に信条を持たない。」⁹¹新約聖書中心であるゆえ、幼児洗礼や礼拝での楽器の使用を認めなかった。そして洗礼は、浸礼でなければならない。これは今日に至っている。聖学院大学チャペルに洗礼槽(Baptistry)があるのは、このことに忠実であるからだ。

さて、碌山がディサイプルス教会で受洗したのであれば、浸礼以外ありえない。小石川独立教会のあった小日向台の木村邸に、洗礼槽があったとは考えられない。だが当時の浸礼は、イエス・キリストのヨルダン川での洗礼のように、東京であれば荒川等の河川で行われたと考えられる。碌山は、留学直前巖本善治のすすめで、青柳猛の親友川井運吉牧師によって洗礼を授けられた。それが川で行われていたならどうであろう。小石川教会の事情と洗礼の方法、このいずれか、若しくはこの両方が碌山をして、教会名を明かさなかった理由になりえないであろうか。

終章 キリスト者荻原守衛

1899年（明治32年）と1900年（明治33年）の2年で、清国では100人を超える宣教師が義和団によって殺害されていた。日本では、宣教以来この頃まで、1人の殉教者も出ていなかったが、外国人宣教師に対する偏見が無かったわけではない。「ミス・ワイリックと他の宣教師」との誤解は、東京の新聞数社の書き立てる誹謗愁傷の記事により、問題は複雑化、深刻化していった。ワイリックは、関口教会の問題が伝道上悪い影響を及ぼす事を恐れ、一人責任を負って、「ミッションとの関係を絶ち、他に伝道の道を求めて進んだ」のであった。

関口教会の閉鎖とともに、ミッションから独立した教会が生れた。「日本における唯一の独立自給教会として喜ばれたが」、⁽⁹²⁾「宮崎は三四年二月ミッション囑託となり、本郷森川町教会の牧師に就任した。」⁽⁹²⁾1903年（明治36年）聖学院神学校開校に伴い、ガイは「石川、宮崎両名を教授に迎えたため、石川もやむなくミッション教会に戻った。両名を失ったため独立教会では説教する者がなく、ただ祈禱勧話で毎日を過ごした。……そこで、会員たちは三八年三月から関口教会の講壇援助中の河合禎三の勧告を受け入れ関口教会に復帰し」、⁽⁹³⁾1906年（明治39年）関口教会は、小石川教会となった。

1901年（明治34年）2月27日、碌山荻原守衛は、川井運吉牧師により小石川で受洗した。これは記録に残る史実である。問題は何故碌山が、受洗教会と司式者名を書き記さなかったかにあった。

碌山は、キリスト教に熱心な青年であったが、明治女学校校長巖本善治は、洗礼の必要性を碌山に説いた。巖本、石川、青柳の関係から、小石川独立教会での洗礼が準備された。ディサイプルス教会の洗礼は浸礼であり、当時であれば河川での洗礼が考えられる。留学を目前に、複雑な教会の事情、面識の無かった洗礼者、そして河川での洗礼。これを、郷里の人々に説明するのは困難であったのではないか。

だが、もう1つの可能性がある。碌山は、全てを知った上で意図的に、教会名、洗礼者名を伏せた可能性である。東京の新聞は、関口教会についての根も葉もない中傷記事を掲載したが、この事を東京在住の碌山が知らなかった、と考える方が難しい。巖本のそば近くにあった碌山が、事の真相を聞かされていなかったとも考え難い。巖本に全幅の信頼を置く碌山は、小石川独立教会で、川

井牧師による洗礼を望んだであろう。碌山は、「基督教信徒たる正式洗礼を授」かり感謝であり、余計なことは語ることを避けたのではないか。教会の複雑な事情を、郷里の人々に説明するのが困難であったのではなく、説明する必要はない、と考えたのではないか。新聞の流言蜚語、その卑属を碌山は無視したのである。

さて黒光だが、たとえ碌山が報告せずとも、彼女はその受洗教会と洗礼者を知る事の出来る立場にあったことは、言うまでもない。

1901年（明治34年）3月21日、前述の碌山が井口喜源治、相馬愛蔵、相馬黒光に宛てた一通の手紙には、「海上無事、殊に小生は初めより少しも船酔を感じず、其点に於て船中第一等に有之、且つ今までは川井先生の室にのみ宿り居り、未だ一度しか下等の食事をなさず、上等の料理に一層肥え太り、日々楽しみと感謝の中に、昼寝のみむさぼり居候間憚りながら御安心被下度候、」⁹³とある。川井の妻小雪は黒光の尊敬する先輩である。碌山は、川井の好意で快適な旅をつづけて来た事を報告し感謝した。だが、黒光は『黙移』をはじめとする、どの著書にも川井による碌山の受洗について記していない。

黒光は俊の死を機縁にキリスト教を離れ、仏教に帰依したという。だが黒光は、それ以前からキリスト教とキリスト教学校に対し、複雑な感情を抱いていた。それは、自らが学んだ宮城女学校やフェリスでの出来事だけが原因ではなさそうだ。

俊は、川井の関係で女子聖学院に入学した。1914年（大正3年）12月、滝野川教会のクリスマス献金125件の中には、青柳夫妻に並んで相馬俊の名もある。⁹⁴だがこの年、問題が起きたていた。

画家中村彝は、俊をモデルに幾つもの作品を制作していたが、この年、一つの作品を大正博覧会に出品した。1925年（大正14年）、金井文彦は『みずゑ』に次のように記している。「中村氏が大正博覧会へ出品した裸婦の畫には、こんな話がある。裸婦のモデルになつた相馬黒光夫人の愛嬢が、その頃某宗教の女学校に通つてゐたのだが、大正博の開かれる前から、今度の博覧会には中村彝氏が相馬俊子さんを描いた畫が出るといふ評判が同窓の間にあつた。それを耳にした校長は、自分の教へ子の肖像が博覧会に出るといふので、非常に楽しみにして開かれたら皆を連れて一緒に見物に行かうと悦んでゐた。その校長といふのは米國人でクリスチャンの老嬢であつた。開會すると間もなく美術館を見物した校長は、教へ子の肖像が裸體であつたので非常に驚いた。憤慨の餘り何うかしてあの畫を撤回したいと云つて、問題を起した事がある。校長さんの言ひ分も竟に徹らなかつたが、大分困つたといふ話だつた。この話はモデルになつた相馬俊子さんと學友である私の妹から、その當時聞いた話である。」⁹⁵中村はルノアールの影響を受けた画家であつた。問題となつた作品は、写実的でモデルが俊であることは一見して分かる。

芸術至上主義的な黒光にとって、娘の行動は誰からも責められる筋合いのもではなかつた。だが、パーサ・クローソン校長はかなりの衝撃を受けている。同行した生徒たちにとって同級生の裸体画、激怒する校長、困惑する美術館関係者、これは絶好の話の種となつた。噂の広まる中、黒光と学校、

黒光と川井の間に何らかの蟠りの残った可能性はなかったか。『黙移』に書かれた川井が、面識のない他人のように描かれているのは何故なのか。女子聖学院について触れられてないのは何故なのか。

黒光は「碌山がクリスチャンらしかったのは研成義塾時代だけで歸朝後そういふ處は」無かったと記し、それを受け笹村は、「渡米前に洗禮など受けたと云つたやうな外形だけのものは歸朝の後は殆ど脱落してゐたやうである」と記した。碌山研究は、碌山の信仰を疑うことから始まった。碌山が何故、何処で、誰によって、どのように受洗したのか、興味を持った東京美術学校関係者はいなかった。ここに研究の限界があった。留学中も帰国後も碌山は少しも変わらなかった。天を畏れる心も、良きサマリヤ人的な生き方も、そして、その作品の中にはキリスト者碌山の姿があった。

碌山が書き残した言葉“Love is Art, Struggle is Beauty”は、今尚碌山の黒光への熱い思いとして語り継がれている。確かに英文の字面はロマンティックであるが、碌山の生涯に照らし合わせる時、道ならぬ恋の賛美と考えるのは不自然である。

1900年（明治33年）7月7日、井口に宛てた書簡の中に、碌山は次のように記している。「喜ぶべき哉、基督教撲滅同盟会の産れたる事や、眞の宗教が迫害に依て衰滅すべきものなるや否は論ずるまでもなき事、さてさて世は面白きものならずや」⁽⁹⁶⁾。碌山は、逆境が人を育て、順境が人を墮落させると信じていた。彼にとって Struggle は、特別の意味を持っていた。

碌山の遺作『女』（図 - 5）は、この言葉を造形化した作品と言われている。黒光は、『女』の鑄造に携わった美大生、山本安曇が、「『誰の顔を作つたかわかるぢやありませんか』と」⁽⁹⁷⁾ 言ったと記している。黒光は『女』が、自分自身であると信じた。『女』の顔（図 - 6）は、黒光に似ている。だが、この作品が表現するものは、黒光の人生のどの部分にも当てはまらない。

黒光は碌山について『彫刻眞髓』の中に、次のように記した。「彼は少年時代に虚弱であつたので誰の病気に対しても深い同情を持ち痒い所に手の届く様に世話をした、彼と前後して死んだ我が二男ジョージの病中は其の実父母にも勝りて昼夜看護をして呉れ亦次女千香が病院通をした時なども九月から十二月迄四ヶ月に渡る間一回も欠かさず病院迄同道してくれ我々を一度も煩はしたことがない時々気の毒になつて止ると却て機嫌を損じ『僕は元来利己的で自我一天張りだから人の為めにするのではない只自己を満足させるのだから余計なことは云つて貰ひ度くない』といふのであつた。」⁽⁹⁸⁾ 虚弱であれば誰でも慈悲深くなるとは限らない。碌山は、家族の愛に支えられて育ち、愛することを知っていた。彼は病人を放っておくことが出来なかった。中村屋の子どもたちに対する献身的な姿を黒光は、感謝を込めて他の著書にも書き残している。だが碌山は黒光に、「僕は元来利己的で自我一天張りだ」と言ったという。多少の言い回しに違はあったかもしれないが、ここに碌山の自己理解がある。自分を知っている人間は、傲慢にならない。悔い改めを経験する。

碌山は、終始一貫アートを通して人生の何たるかを知ろうと努力した。そして、愛こそがアートであると考えようになった。愛なくば全てが虚しい。戦後の碌山研究が陥った最大の過ちは、

“What is Art?”という碌山の問の答えが、“Love is Art”では、文脈が合わない、これは“Art is Love”⁽⁹⁹⁾を意味するのであろう、と考えた事であった。このボタンの掛け違いが、碌山の実像を見づらくした。碌山は決してアートが愛であるとは思っていない。碌山にとってアートは、手段であり、目的はでない。渡米した碌山が、美術学校か神学校か、入学を真剣に悩んだことを忘れてはならない。

帰国後着手した最初の作品に、碌山は『ストラツグル』という題命を付けた。「処がどうもやつて居ると何時の間にかミケランジェルの奴隷と云ふやうになつてしまつて……いやになつて叩つ壊してしまつた」⁽¹⁰⁰⁾という。碌山が嫌ったのは巨匠ミケランジェロの作風に似てしまったからなのか。碌山の作品には、巨匠ロダンの作品に似たものが複数ある。碌山が本当に嫌ったのは、その形が『奴隷』に似たからではないのか。ミケランジェロは、自らの境遇を嘆き、複数の奴隷像を作った。だが、碌山のstruggleは、誰かに、また何かに支配される奴隷のstruggleではなく、自由人のstruggleでなければならなかった。この幻の作品の後に、碌山は『文覚』(図-7)を完成させる。その制作中、「碌山はストラツグル・イズ・ビューティーと云つたものです」⁽¹⁰¹⁾と、黒光は記している。だが内柔外剛、『文覚』は碌山の望んだ作品とはならなかった。

碌山は気も狂わんばかりの混乱の中、『デスペア』(図-8)の制作に入った。『デスペア』は見事な失敗作となったが、不思議な事にこの絶望の像以後に作られた作品は全て傑作となる。碌山は徹底して自らに絶望する道を選んだ。そして信頼の絶望の像、『女』が生れた。

Love is Art, Struggle is Beauty. は、まことに碌山の思想の中核であり、そして作品『女』は、碌山自身であったといえよう。彼のStruggleがこの美しい作品となった。

戦後の碌山研究は、戦前の資料の整理と戦後存命の関係者への聞き込み調査に始まった。だが、証言には人それぞれの思いが反映する。また、高齢の証人の記憶は時として定かでなかった。

懸命の努力によって集められた資料であったが、それらから導き出された結論は時として強引なものであった。

石井は、彫刻家の目の通し碌山作品を論じた。だが、思想性の高い碌山作品のその思想にまで立ち入る事は控えた。

そして60年、新しい資料の発掘と考察は繰り返された。いつの時代でも碌山研究に必要なものが3つある。歴史センス、芸術理解、そしてキリスト教である。このキリスト教については、黒光の発言を言い訳に、避ける傾向もあった。

日本は世界をリードする画家、彫刻家、服飾・衣装デザイナー、カーデザイナー、アニメーターなど多くのアーティストを輩出する国となった。模倣する時代から模倣される時代、造形芸術の裾野は広がった。戸張の言う、碌山「の云はんとし尽さんと欲した其目的は花となり然して幾多の實となる」時代に、光太郎のいう「面白い世の中に入っただけかもしれない。だがキリスト教が分からない限り、碌山とその作品の真の意味を理解する事は出来ないと言わざるをえないのである。

注

- (1) 荻原守衛「書簡」,(碌山美術館企画編集『荻原守衛の人と芸術』, 信濃毎日新聞社, 昭和54年, 206頁所収)。以下『荻原守衛の人と芸術』として引用する。
- (2) 笹村草家人『笹村草家人文集 上巻』, 無名会刊行会, 昭和55年, 109頁。
- (3) 高村光太郎「死んだ荻原君」(荻原守衛他『彫刻真髓』 博文館, 明治44年, 復刻版 碌山美術館, 平成3年, 211頁所収)。以下の『彫刻真髓』からの引用は, この復刻版による。
- (4) 齊藤與里「荻原守衛君の追懐」, 『彫刻真髓』, 218頁。
- (5) 戸張孤雁「故荻原守衛君に就て」, 『彫刻真髓』, 206頁。
- (6) 笹村草家人「碌山と光太郎」, 『笹村草家人文集 上巻』, 132頁。
- (7) 笹村草家人「あとがき」(東京藝術大学石井教授研究室編『彫刻家 荻原碌山』, 岡書院, 昭和31年, 305頁所収)。以下『彫刻家 荻原碌山』として引用する。
- (8) 石井鶴三「彫刻の先覚荻原碌山」, 『彫刻家 荻原碌山』, 49頁。
- (9) 石井, 前掲書, 64~65頁。
- (10) 笹村草家人「碌山と光太郎」, 『笹村草家人 上巻』, 132~133頁。
- (11) 笹村, 前掲書, 128頁。
- (12) 石井鶴三「彫刻の先覚荻原碌山」, 『彫刻家 荻原碌山』, 51頁。
- (13) 高村光太郎「荻原守衛」, 『彫刻家 荻原碌山』, 3~4頁。
- (14) 相馬黒光「碌山のことなど」, 『彫刻家 荻原碌山』, 34頁。
- (15) 荻原守衛「書簡」,(碌山美術館企画編集『荻原守衛の人と芸術』, 信濃毎日新聞社, 昭和54年, 276~277頁所収)。以下『荻原守衛の人と芸術』として引用する。
- (16) 荻原, 前掲書, 270頁。
- (17) 荻原, 前掲書, 271頁。
- (18) 荻原, 前掲書, 272頁。
- (19) 荻原, 前掲書, 271頁。
- (20) 荻原守衛「書簡」, 『荻原守衛の人と芸術』, 243~244頁。
- (21) 荻原守衛談・森田生筆録「仏蘭西の美術学生」, 『荻原守衛の人と芸術』, 114頁。
- (22) 荻原, 前掲書, 264頁。
- (23) 荻原, 前掲書, 265頁。
- (24) 荻原, 前掲書, 282頁。
- (25) ウォルター・バック「荻原守衛君」, 『彫刻真髓』, 222頁以下。
- (26) 本多功「碌山の追憶」, 『彫刻家 荻原碌山』, 39頁。
- (27) 安井曾太郎より笹村草家人に宛た昭和29年8月の書簡, 『彫刻家 荻原碌山』, 168頁。
- (28) 斎藤与里「荻原守衛君の追懐」, 『彫刻真髓』, 215頁。
- (29) 高村光太郎「死んだ荻原君」, 『彫刻真髓』, 209頁。
- (30) ウォルター・バック「荻原守衛君」, 『彫刻真髓』, 223頁。
- (31) 与謝野寛「ロダン翁を訪ふ(三)」(「東京朝日新聞」明治45年7月16日 第6面掲載)。
- (32) 高村光太郎「白熊」, 『高村光太郎全集第二巻』, 筑摩書房, 昭和32年, 8頁。
- (33) 高村, 前掲書, 10~11頁。
- (34) 高村, 前掲書, 37~38頁。
- (35) 高村光太郎「荻原守衛」, 『彫刻家 荻原碌山』, 4頁。
- (36) 高村, 前掲書, 5頁。
- (37) 高村光太郎「死んだ荻原君」, 『彫刻真髓』, 209頁。
- (38) 高村光太郎「父との関係(アトリエにて・3)」, 『新潮』, 四月號 第五十一巻 第四號 昭和二九年, 43頁。
- (39) 高村光太郎「パリ」, 『高村光太郎全集第三巻』, 288頁。

碌山と小石川の教会

- (40) 高村光太郎「珈琲店より」、『趣味』第5巻 第4号 明治43年，19頁以下。
- (41) 高村光太郎「パリ」、『高村光太郎全集第三巻』，287頁。
- (42) 高村光太郎「出さずにしまつた手紙の人束」、『スバル』，第2巻 第7号 明治43年，復刻版 臨川書店内「スバル」複製刊行会，昭和40年，15～16頁所収。以下の『スバル』からの引用は，この復刻版による。
- (43) 高村，前掲書，10頁。
- (44) 高村，前掲書，16頁。
- (45) 高村光太郎「彫刻一途」、『高村光太郎全集第三巻』，285頁。
- (46) 高村，前掲書，286頁。
- (47) 白瀧幾之助より笹村草家人に宛てた昭和29年9月の書簡，『彫刻家 荻原碌山』，164頁。
- (48) 相馬黒光『黙移』，女性時社，昭和11年，4頁。
- (49) 相馬，前掲書，5頁。
- (50) 相馬，前掲書，3頁。
- (51) 相馬，前掲書，4頁。
- (52) 相馬，前掲書，4頁。
- (53) 相馬，前掲書，6頁。
- (54) 相馬，前掲書，24頁。
- (55) 相馬，前掲書，12頁。
- (56) 相馬，前掲書，13頁。
- (57) 相馬，前掲書，8頁。
- (58) 相馬，前掲書，24頁。
- (59) 相馬，前掲書，28頁。
- (60) 相馬，前掲書，34～35頁。
- (61) 相馬，前掲書，36頁。
- (62) 相馬，前掲書，66頁。
- (63) 相馬，前掲書，29～30頁。
- (64) 相馬安雄（編）・相馬黒光『滴水録』，相馬安雄，昭和31年，序文。
- (65) 笹村草家人「碌山攷」、『彫刻家 荻原碌山』，86頁。
- (66) ジャーナリスト。戦前，同盟通信のロンドン特派員として軍縮会議等を取材報道。戦時中は，ラングーン支社長，サイゴン支社長を歴任し，戦後時事通信の編集局長，監査役を務める。
- (67) 秋山操『基督教会（ディサイプルス）史』，朋文社，昭和48年，630頁。
- (68) 秋山，前掲書，631頁。
- (69) 荻原守衛「書簡」、『荻原守衛の人と芸術』，234頁。
- (70) 井口喜源治「荻原守衛氏略歴」、『彫刻真髓』，191頁。
- (71) 相馬黒光「碌山のことなど」、『彫刻家 荻原碌山』，19頁。
- (72) 荻原守衛「書簡」、『荻原守衛の人と芸術』，238頁。
- (73) 秋山操『基督教会（ディサイプルス）史』，629頁。
- (74) 秋山，前掲書，477頁以下。
- (75) 秋山，前掲書，629頁。
- (76) 秋山，前掲書，643頁。
- (77) 秋山，前掲書，644頁参照。
- (78) 秋山，前掲書，638頁。
- (79) 秋山，前掲書，639頁。
- (80) 秋山，前掲書，639頁。
- (81) 秋山，前掲書，630頁。
- (82) 秋山，前掲書，640頁。

- (83) 秋山, 前掲書, 641頁。
- (84) 秋山, 前掲書, 421頁参照。
- (85) 秋山, 前掲書, 422頁参照。
- (86) 秋山, 前掲書, 42頁。
- (87) 秋山, 前掲書, 424頁。
- (88) 秋山, 前掲書, 425頁。
- (89) 秋山, 前掲書, 426頁。
- (90) 秋山, 前掲書, 2頁。
- (91) 秋山, 前掲書, 3頁。
- (92) 秋山, 前掲書, 426頁。
- (93) 荻原守衛「書簡」, 『荻原守衛の人と芸術』, 238頁。
- (94) 秋山操『滝野川教会』, 日本キリスト教団滝野川教会 昭和五四年, 39頁参照。
- (95) 金井文彦「中村彝氏追憶」, 『みづゑ』二月號(中村彝追悼號)第二四〇號, 美術出版, 大正一四年, 19頁。
- (96) 荻原守衛「書簡」, 『荻原守衛の人と芸術』, 228頁。
- (97) 相馬黒光「碌山のことなど」, 『彫刻家 荻原碌山』, 23頁。
- (98) 相馬黒光「家庭に於ける荻原オヂサン」, 『彫刻眞髓』, 193頁。
- (99) 碌山の“Love is Art, Struggle is Beauty”を1956年(昭和31年)3月発行の『彫刻家 荻原碌山』別章藝術論(277頁)には, 作者言として「Art is love, Struggle is beauty. (註 - 藝術は愛也, 争闘は美也と譯しうるが相馬黒光によれば Struggle は煩悶の意と云ふ)」とある。
- (100) 荻原守衛「談片」, 『彫刻眞髓』, 77頁。
- (101) 相馬黒光「碌山のことなど」, 『彫刻家 荻原碌山』, 23頁。

図録



図 - 1 光太郎の間借りしていた
パットニーの家
2002年9月撮影



図 - 2 パットニーを流れるテムズ河 2002年9月撮影



図 - 3 パットニー・ブリッジ 2002年9月撮影



図 - 4 パットニー・ブリッジ 2002年9月撮影

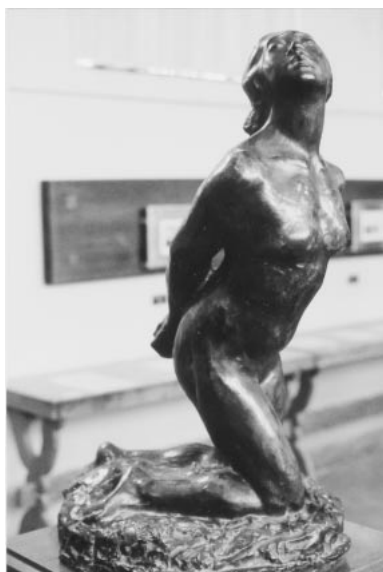


図 - 5 『女』 碌山 (1910年制作)
碌山美術館所蔵1993年1月撮影

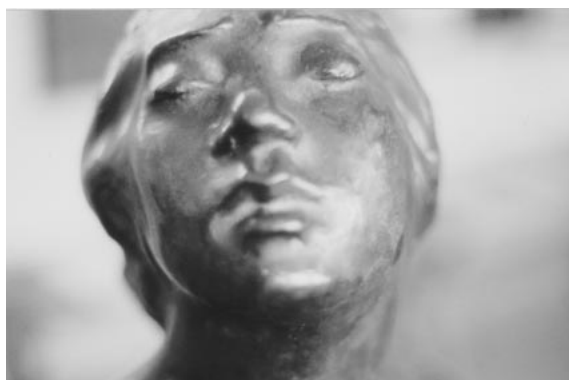


図 - 6 『女』の顔 1993年1月撮影
碌山美術館所蔵



図 - 7 『文覚』 碌山 (1908年制作)
碌山美術館所蔵1993年1月撮影



図 - 8 『デスペア』 碌山 (1909年制作) 1993年1月撮影
碌山美術館所蔵